

## ウィークデイ CBRN 早期警報システムの未来

呼び出されたのは深夜だった。こういう仕事にはよくあることだ。夜間通用品をくぐり、エレベーターで5階まで上がって指定された部屋に入った。

それからずいぶん待った。1時間が経過し、さすがにおかしいと思い始めたころ、スマホが鳴った。

——あなたは、閉じ込められました。

そんなメールだった。添付ファイルをクリックしたら、スマホ上に新しいアイコンが現れた。「CBRN 早期警報システム」。その名称に見覚えがあった。最近、『ウィークデイ』という本がベストセラーになっていた。白昼のビジネス街での無差別テロ事件を描いたパニック小説だ。そのなかで、主人公の特殊部隊員が操作する重要なツールとして登場していた。

特定のエリア内の有毒物質や放射線をリアルタイムで検知し、表示する。建物やイベント会場などでテロが発生した際、手元の端末をこのシステムに同期させれば、どの位置がどのように危険か、どのルートでの避難が最も安全かなどを、素早く的確に見極めることができる。現実が存在し、すでに実用もされているシステムだということも聞いていた。今ここに表示されているのが本物なのかどうかは分からなかったが、僕は全身が引き締まるような気分になっていた。

警察官や自衛官、さらには特殊部隊員。犯罪やテロから人々を守るヒーローに、僕はずっと憧れていた。彼らが活躍する小説やゲームが大好きだったし、警察が主催するテロ対策訓練に参加したこともあった。

子供のころはそういう仕事に就きたいと考えていたが、今は俳優として演じてみたいと強く願っているわけだ。だからあの小説が映画化されると聞いて、絶対に主役の座を射止めたと思った。主役が無理でも、脇役でもいい、いやそれだって簡単にはいかないということは分かってはいたけれど、情熱なら負けない。僕はあらゆるコネクションをたどって、売り込みをかけていた。プロデューサーには手紙を書いた。もちろん原作は何度も読み直していた。

### CBRN 早期警報システムとは

テロにおいて警戒すべき(対象)物質はその頭文字からCBRN(シーバーン):C:有毒化学剤、B:生物剤、R:放射性物質、N:核兵器)と呼ばれている。テロ対策を主目的として開発された CBRN 早期警報システムは、監視エリア内の有毒化学剤・生物剤・放射線の存在を高精度かつリアルタイムで検知し集中監視する。大規模イベントや大型施設、地域などの安全・安心のため、テロ行為の抑止と避難指示をするための情報源となる。

物語の登場人物になった気持ちで、アイコンをクリックした。画面に迷路のような地図が表示された。それが、この階のフロアマップだということがすぐに分かった。

このビルは1階から5階まで、間取りが違う。フロアごとに大きささまざまなスタジオが設置されているからだ。映画やドラマ、CMなどの撮影、あるいは一般にレンタルされてサバイバルゲームなどに使われることもある場所らしい。

その時、メールがまた表示された。

——大事なことを教えましょう。そのビルは今、非常事態にあります。生き延びたいければ、頭と、そしてそのアプリを使うことです。

——あなたに与えられた時間はわずかです。このビルは、24:00 に爆破されます。これより、外部との電話、メール、インターネットへのアクセス、全て不可能となります。では、幸運を祈ります。

時計を確認した。23:55。あと5分以内に逃げ出さなくてはならないということだ。

本当なのか。そして誰からのメールか。ここに僕を呼び出した人だろうか。映画版『ウィークデイ』のプロデューサー、K氏だ。僕は昨日、そんな人から直接メールをもらったのだ。映画の出演について、ぜひ一度会って話したい、と。手紙を書いたかいたがあったと、僕は舞い上がってここに来てしまったのだ。そのメールを開き、アドレスを確認してみた。簡単に捨てアドが作れるブラウザメールだった。これは偽物だ。今更僕は気付いた。だまされたのだ。僕があ映画に出がっていることを知っている誰かに。

しかし、一体何のために。訳が分からなかったが、考え込んでいる暇はない。取りあえずドアを開けて控室の外を確認してみた。

明かりが消えていた。廊下に一歩踏み出す。非常灯の光はとても暗く心もとないものだったが、廊下の左右には各スタジオのナンバーが大きく蛍光色に光って見えた。

耳を澄ましてみた。スタジオの中から、しゅうしゅうと気体が噴出するような音が聞こえた。

明らかに異変が起きている。これはどうやら、マジらしい。

スマホで110番や119番にかけてみようと考えた。しかし電波が届いていなかった。ネットにもつながらない。控室に戻り設置されていた受話器を取り上げたが、ウンともスンとも言わない。電波も、回線も、何らかの方法で遮断されているようだ。

しかしCBRNシステムだけは機能していた。外部との通信は落ちているのに、ここ5階のセンサーが感知したさまざまなデータはスマホ画面に細かく表示され続けていた。それらがマップ上で、まるで生きている動物の血管のように脈打っていた。

CBRNシステムは、分散型の神経系統をもつ生物にも似たネットワークだ。プラナリアが体の部位を切られてもしぶとく生存続けるように、一部分が破壊されたり分断されたりしても、つながっている範囲内で自動的に独立ネットワークを再構築して、任務を遂行し続ける。有事の際の状況に対してタフに作られているのだ。

操作方法なら、幾度となく読み込んだ小説で、自然と覚えている。主人公の手さびきを思い出しながら、画面をフリックし、クリックする。フロアマップ上に危険範囲が赤く表示される。点滅する記号や数値から、それは致死レベルに有毒な気体が充滿している範囲だということが分かった。

足がすくみ、息が苦しくなった。僕は必死で自分を落ち着かせようとした。

ガスの発生源は1か所ではないようだ。このフロアの全スタジオの内部が真っ赤だった。ドアの隙間から少しずつ漏れ出し、拡散しているようで、廊下にも、危険範囲がじわじわと広がり始めていた。

現在安全な場所も、むしろまれるのは時間の問題だ。急がなくてはならない。僕はひたすら目を凝らした。どっちに進めばいいのか。画面のマップの中に、細い線が浮かび上がった。曲がりくねってはいたが、ここから階段まで、1本だけ、安全に進めるルートがあった。

僕は駆け出した。

4階に降り立つと、アプリは自動的にリロードして、画面は4階のフロアマップに切り替わった。

ここもほとんどの範囲が、真っ赤だった。僕は顔を上げて現実の風景を確認した。

このフロアは廊下を挟んで、左右に大きなスタジオが二つある。その両側から、ごうごうと不穏な音がする。室温が高いことも感じられる。

もう一度画面を見る。どうやら、火だ。スタジオ内はすでに炎に包まれており、壁もあとわずかですでに燃え上がる温度に達していた。

警備員は巡回していないのだろうか。それに、これほどの状況になっけていても、外部には気付いてもらえていないのだろうか。

僕は思い出した。ここは巨大スタジオなのだ。怪獣が口から火炎を吐いていることもあるだろうし、スタントマンが飛んだり跳ねたりしていることもあるだろう。どんな音響も振動も、不審に思われることはないのだ。そもそも撮影現場は守秘性が高く、内部で行われていることをできる限り隠すような構造にもなっている。

そこまで考えを巡らせたとき、僕の中に一つの疑念が浮かんだ。今の僕は、この必死な姿は、誰かに、観察されているのではないか。人をワナにはめてひどい目に遭わせる。時には殺してしまう。その様子を隠しカメラで撮影して、スナップムービーとして販売する。あるいはひそかに趣味の悪い金持ち向けに生放送する。そんなアングラのマーケットが存在すると聞いたことがある。

大掛かりなセティングも、スタジオビルなら怪しまれることなく行うことができたはずだ。僕は、はめられた。そして残酷な脱出ゲームの主人公を、演じさせられているのではないか。

3階。ざざざと音がする。鼻をつく匂い。アプリを確認する。複雑な化学式が羅列されている。スタジオ内に、どうやら化学物質がまき散らされているようだ。廊下まで液体があふれ出している場所もある。

テロの危機をいち早く検知して安全な避難誘導に貢献

CBRN 早期警報システム



IHI 技報 Vol.57 No.1 (2017)

しかし、ここでも何とか安全なルートは見つかった。フロア全体をジグザグに進む形になった。

2階。アプリ画面を見て目を疑った。放射線が表示されていた。フロアの両端に、明らかに、放射性物質が存在している。

スタジオの分厚い壁には放射線を遮断する機能もあるようだが、完全ではない。被爆を避けるためには、秒単位の勝負となるだろう。特に急いで駆け抜ける必要がある場所なのだ。

その経路は2本あった。どちらも直線コースだ。僕は放射線が少しでも弱そうな右側を選んだ。

ついに1階にたどり着いた。時計を見る。あと2分だ。急がなくてはならない。ところがアプリを見て僕は思わずうめいた。

1階の地図は表示されていたが、センサーのデータは消えていた。危険箇所がどこか、分からなくなっていた。

そこに1行のコメントが現れた。

——サポートは終了です。あとは自分で考えてください。

顔を上げる。ここも暗かったが、わずかな光の中を濃い煙がたなびているのが見えた。猛獣の息遣いのような空気音や、雨垂れのような水音が、あちこちから聞こえていた。ここでは複数のトラブルが同時に発生しているようだ。

この期に及んで CBRN システムが使えないとは。「自分で考えてください」そのメッセージは何を意味するのだろうか。

答えが、あるのか。

あと1分。汗が背中を伝う。僕はこれまでの行程を思い出す。抜け道を見つけ、迷路を縫うように通過してきた。5階、4階、3階、2階、そして1階……。

待てよ？……何かが頭の中にひらめいた。何か、とても大切なことが。

5階では、少し進んで右折し、しばらく進んでもう一度同じ方向に曲がり、直進した。

4階は、ただ真っすぐフロアを横切った。

3階は、角が多かった。進んで、右に。そしてまた右、次は左。そして左……。

2階は、通路が二つできていた。並行した2本の直線。どちらを通ってもよかった。

「あっ」

僕は声を上げていた。

5階で通ったコースは数字の「7」の形だった。

4階はただの棒線「-」。

3階は「2」。

そして2階の平行線は「=」ではないか。ここまでの形を並べると。

7-2=

僕は画面に目を落とす。1階の通路、その不規則なマス目の中に、きれいな「5」の文字が浮かび上がってきた。

時計は、23:59。残り時間は1分を切っている。僕ははじかれたように走りだした。迷うことなく、走り、曲がり、走り、曲がり、駆け抜けて。「5」の文字をたどった。

最後の直線。その先に、やはり、見えた。非常口の金属扉が。

確信をもってレバーに手を掛けた。手応えがあった。小気味よい音を立てて、扉は開いた。

外には、スーツ姿の男性が立っていた。

初対面だったが僕はそれが誰であるかを知っていた。

「はじめまして。映画『ウィークデイ』プロデューサーのKさんですね」

息を整えながらそう言って、頭を下げた。相手は眉を上げた。

「そのとおりだ。なぜ分かったのかね？」

「7-2=5。1週間の7日から土日を引いた5日間。つまり最後の答えは『ウィークデイ』です」男はほほ笑んだ。右手を僕に差し出しながら言った。

「合格だ。『ウィークデイ』の主役は、君にやってもらおう」

STORY BY 渡辺 浩式

小説家・ライター。ゲーム制作会社、株式会社 GTV 代表を務める。代表作に「ゲームキッズ」「プラトニックチェーン」「KILL」の各シリーズ、「怪人 21 世紀 中野ブロードウェイ探偵 ユウ & AI」「吐田君に言わせるとこの世界は」などがあ